2　国内でのアユ冷水病の発生状況

（1）天然水域

農林水産省の調査によると、平成21年度全国で天然溯上又は放流されたアユが生息している河川や湖沼は北海道から沖縄県まで全47都道府県、704水域あります。そのうち、河川の121水域（17.2％、31都道府県）で冷水病が発生しました。発生率と発生水域数は平成15年度(27.4%、189水域)をピークにして最近は少し減ってきています（図1）。

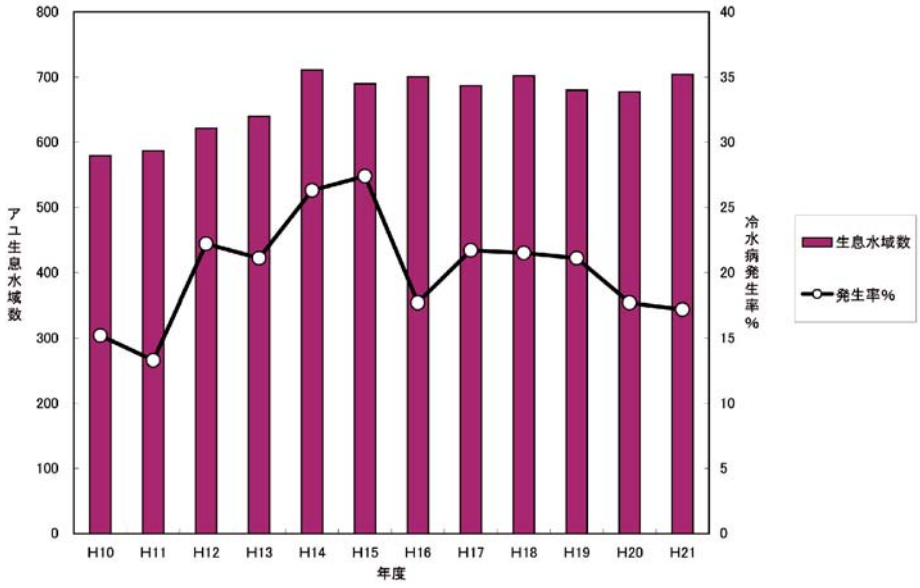

図１　天然水域での冷水病発生状況

河川の水温が13～23℃のときに発生していますが15～20℃での発生が主で84％を占めています。なお、湖沼では平成15年以降、冷水病は発生していません。

京都府内では平成21年度には、15の内水面漁協が他県から取り寄せた合計26トンのアユを放流されました。京都府内水面漁業協同組合連合会の集計によると、うち5つの漁協から冷水病の発生が少しあったと報告されていますが、大量斃死は見られなかったようです。これは毎年実施している保菌検査の結果を参考にされて、保菌率の低いアユ種苗が放流されてきた成果の表れではないかと考えています。

放流アユに必要な性質の一つとして、友釣りのおとりに対する「追い」の強いことが要求されます。現在、府内で放流されているアユの90％以上は「追い」が強いとされる琵琶湖産です。それ以外に海産や人工生産アユが少数放流されています。人工生産では冷水病菌などを保有しない健康なアユを生産できるのですが、湖産アユに比べて「追い」が弱いのではないかという意見があります。健康で且つ「追い」の強いアユを作るのが人工種苗生産の究極の目的ですが現時点では至難の業のようです。

（2）養殖場

平成21年度には43府県、321か所でアユ養殖が行われていました。養殖場の数は平成10年度には473か所ありましたがそれ以降減少しています。冷水病の発

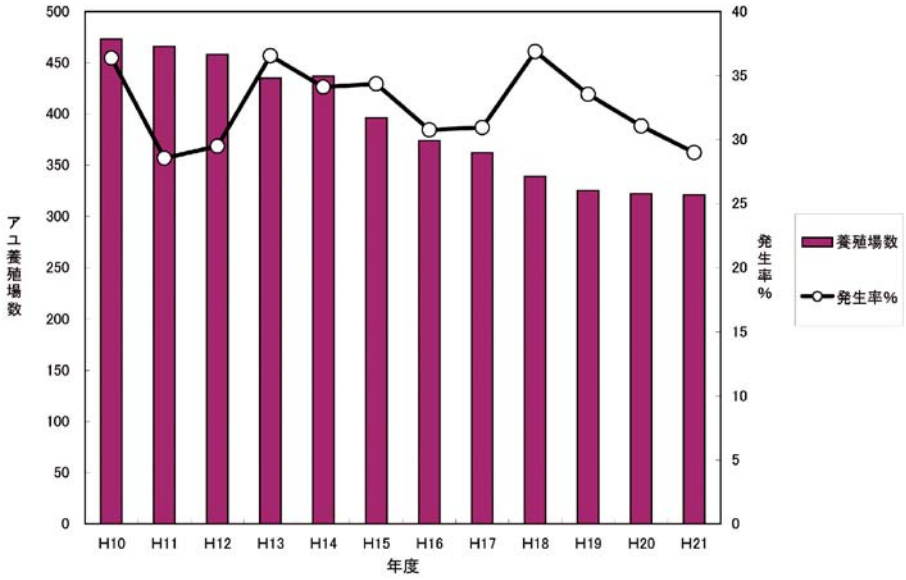

図２　養殖場での冷水病発生状況

生は23県、93か所の養殖場で見られました。人工種苗生産施設から蓄養、大型アユの養成まで全ての生産段階で発生しており、最近10年間は毎年およそ30～35％の養殖場で発生しています（図2）。